

研究課題:地域で生活する高齢者のオーラルフレイルに関連する要因

-栄養と歯科口腔機能の向上が高齢者の身体的フレイルに与える影響の検討-

研究者名:佐藤公子、平松喜美子、渡邊克俊

所属:島根県立大学

高齢者が要介護状態になる原因の一つ「高齢による衰弱」には「虚弱：フレイルティ (frailty)」を含んでおり、低栄養との関連から予防が重要である。また、歯数や口腔機能の低下が高齢者のサルコペニアやロコモティブシンドロームさらに栄養障害栄養摂取・健康状態にまで及ぼすことからオーラルフレイルを早期発見し「高齢による衰弱」予防を行うため栄養と口腔機能との関連を検討した。対象者は平成 30 年度介護予防教室に参加し、調査に同意した 75 名である。調査方法としては、栄養評価(身体計測、簡易栄養状態評価表)と口腔機能評価(RSST、OD、咀嚼能力検査、義歯も含めた咬合状態評価、主観的口腔の健康状態)を用いた。統計解析には、カイ 2 乗検定、Mann-Whitney の U 検定、Spearman 相関関係係数を用いた。

現在歯数 2 群間で差があった項目は、家族数、義歯の使用、下腿周囲長、咀嚼能力検査、パタカの 5 項目で 20 本以上現在歯数群の方が良好な結果を示した。また、栄養状態の指標では上腕周囲長、下腿周囲長、簡易栄養状態総合評価値、口腔機能では、咀嚼能力検査、最大圧、咬合力など 5 項目で 20 本以上現在歯数群が有意に高値を示した。続いて、義歯群間比較では、栄養状態と関連がなく、口腔機能評価において現在歯数 2 群間で有意差のあった 5 項目に加え、舌運動の巧緻性を示す「タ」、「カ」の OD 値に有意差が認められた。

一方、栄養状態では、歯の喪失が骨格筋量を示す上腕周囲長や下腿周囲長、簡易栄養状態総合評価値に影響を与えていた。このことから、歯の喪失は、咀嚼能力の低下と関連して食欲や嗜好に影響を与え、摂食可能な食品の範囲縮小につながる事が考えられる。また、複合音節パタカの OD 値が現在歯 20 本以上群と義歯が必要ない未使用群ともに有意に高値であったことは歯牙の喪失予防が嚥下の維持に関わる口腔機能の一端を担っていることを示唆している。安全に食事を楽しむためには、「むせ」など自分自身の食形態と嚥下の変化に早期に気が付く必要がある。現場でのオーラルフレイル早期発見・予測には残存歯数(20 本が境界)の調査が指標になる可能性が示唆された。